

第155回 鶴見大学図書館 源氏物語研究所 貴重書展

# 歌仙 Kasen と

— 共鳴する和歌と源氏物語の世界 —

◆ 展示構成と主な展示品

〔Ⅰ〕 — 三十六歌仙

〔日野資茂〕筆「三十六歌仙和歌」一軸

「三十六歌仙集」一冊

〔Ⅱ〕 — 歌仙と源氏物語

〔竹屋光忠〕筆「源氏物語」二〇巻二〇冊

「源氏物語」五四巻五四冊〔江戸初期〕写

〔Ⅲ〕 — さまざまな歌仙

〔歌仙絵〕断簡 一軸〔室町後期〕写

〔土佐光孚〕筆「三十六歌仙」色紙 三六枚

〔堯然〕筆「三十六歌仙 和歌」断簡一幅

〔定家卿眞蹟帖〕一帖 文政五年序刊

〔荒木素白〕筆「女房三十六人歌仙」一帖

〔歌仙〕五巻五帖・〔江戸前期〕写

Monogatari

# 物語

2022

2/14 月 - 3/14 月

入場無料

〔2/14~3/5〕 月~金 8:50-21:00 土 8:50-18:00

〔3/7~3/12〕 月~金 8:50-18:00 土 8:50-12:30

〔3/14〕 卒業式のための特別開館 8:50-16:00

● 日曜・祝日閉館 ● 於 鶴見大学図書館1階エントランスホール

鶴見大学源氏物語研究所

HP <https://genjiken.wixsite.com/tsurumi>

Twitter <https://twitter.com/TsurumiGenjiken>



## ご挨拶

鶴見大学図書館では毎年、年に数回の貴重書展を行っており、新春は源氏物語研究所が担当することが恒例となっています。しかし、昨年は新型コロナウイルスに関わる状況を考慮して図書館における展示は中止したため、2年ぶりの開催となりました。

『源氏物語』は1000年以上にわたり読み継がれてきましたが、他の古典籍と同様に、作者自筆の本がそのまま現在に伝わったわけではありません。それでも今日作品として読めるのは、平安時代から江戸時代に至る数百年もの間、数え切れないほどの人々が書写し、幾種類もの版本や活字本が刊行されてきたからなのです。そうしたさまざまな書物が何百年にもわたって大切に受け継がれているということは、実は世界の中では必ずしも当たり前ではないのです。

本学源氏物語研究所は、『源氏物語』とその享受資料や関連文献を収集し、書物に即した基礎的調査を行い、また広く学内外に公開することを大きな仕事の柱としております。古典籍の収集に努力いたしますのは、書物こそが確実に文学や文化を伝え、研究を進めるための基盤となるからです。

さて、今回は「歌仙と物語」をテーマと致しました。和歌の名手「歌仙」ともてはやされる歌人は、万葉の時代の歌人を初めとして何人もいますが、とりわけ平安中期に藤原公任ふじわらのきんとうが『三十六人撰』を編んでからは、そこに撰ばれた歌人が「三十六歌仙」と総称されるようになり、それが歌仙集の雛形となり、歌仙の代表となりました。彼らの詠んだ和歌の多くは、貴族たちにとって必須の教養、あるいは常識となり、以降の日本文化に深く根付いていきます。それを端的に示す例が引歌ひきうたでしょう。これは会話などの中に名歌の一部分を引用する技法です。たとえば、現代でも「とらぬ狸のなんとやら」と有名な諺を引用することで、自分の言いたいことを暗示する場合があります。同じようなことを“諺”ではなく“和歌”によって行うのが引歌です。『源氏物語』の中にもさまざまな引歌が散りばめられています。『源氏物語』の作者、またはその登場人物たちが歌仙達の有名な和歌に託して何を言おうとしているのか、一種のなぞ解きのような感覚でお楽しみください。

2022年2月

源氏物語研究所所長 中川博夫

## 目次

I 三十六歌仙…………… 1頁	I 『〔歌仙〕〕〔江戸前期〕写
A 『三十六歌仙和歌〕〔江戸中期〕写	J 『〔歌仙絵〕〕〔断簡〕〔室町後期〕写
II 歌仙と源氏物語…………… 1頁	K 『三十六歌仙〕伝堯然親王筆
B 『女房三十六人歌仙〕〔江戸前期〕写	L 『定家卿眞蹟帖〕文政5年序刊
C 『源氏物語〕〔江戸中期〕写	IV 新収資料…………… 8頁
D 『〔三十六歌仙集〕〕元禄7年刊	M 『一葉抄〕〔安土桃山時代〕写
E 『源氏物語〕〔江戸初期〕写	N 『源氏物語絵〕〔江戸前期〕写
F 『〔三十六歌仙〕〕〔江戸末期〕写	O 『源氏物語色紙〕〔江戸前期〕写
G 『源氏物語〕*伝嵯峨本	P 『源氏物語絵巻〕伝智仁親王筆(詞書)
H 『源氏物語〕〔室町後期〕写	Q 『源氏物語〕(総角)〔江戸前期〕写
III さまざまな歌仙…………… 6頁	凡例・担当者一覧等……………12頁



# I 三十六歌仙

三十六歌仙は平安中期成立の『三十六人撰』に挙げられた柿本人麿以下36人の歌仙(和歌の名手)の総称。『三十六人撰』は藤原公任が各歌仙の秀歌(代表作)3首または10首を挙げて計150首とした歌集で、こうした歌集を秀歌撰と呼ぶ。

## A、三十六歌仙和歌 1軸 登録番号:1233461

卷子装。〔江戸中期〕写。伝日野資茂筆。緑地花菱文様布表紙。外題、金砂子散題簽(縦14.5cm×横1.5cm)に「日野中納言資茂卿三十六歌仙」と本文別筆で墨書。見返し、金箔金砂子散。料紙、金箔銀砂子散雲母刷。紙高32.5cm。字高、約28.5cm。極札、「三十六首哥仙/日野中納言資茂卿」(縦10.2cm×横2.1cm)、見返し左上に貼付。

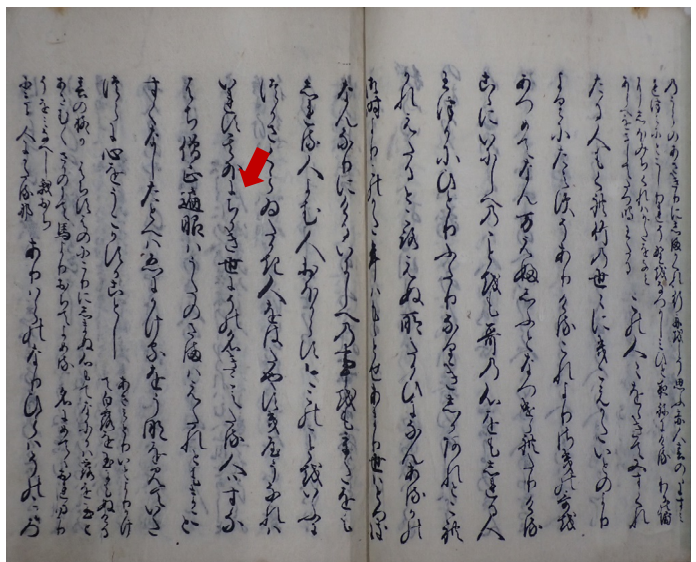
柿本人麿は代表的な万葉歌人。掲出の和歌は「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に嶋がくれゆく船をしぞ思ふ」。「明石」と「明し」を掛け、「ほのぼのと明けゆく明石の浦の朝霧の中、島に隠れゆく船を思うことだ」の意。公任は『九品和歌』で最上位の和歌として評価した。



## 〔参考1〕古今和歌集(伝嵯峨本)1巻2冊 登録番号:1380564・1380565

袋綴。〔江戸前期〕刊。後印。縹色無地表紙。縦26.4cm×横18.5cm。外題、表紙左肩の白題簽(縦16.3cm×横3.4cm)に「古今和歌集 上(下)」。本文料紙、楮紙(裏打あり)。見返しも同じ。遊紙なし。毎半葉9行、和歌1行書。字高、約21.0(仮名序)、20.8cm(和歌)。

『古今集』仮名序では「柿本人麿なむ、歌の聖なりける」と評される。また、「ちかき世にその名きこえたる人」(矢印)として、在原業平や小野小町など6人が挙げられ、「六歌仙」と総称される。三十六歌仙はこうした基盤の上に成立した。



# II 歌仙と源氏物語

歌仙の和歌は貴族の常識、または必須の教養となり、その一部分がしばしば物語などに引用される(それを「引歌」という)。

## B、女房三十六人歌仙 1帖 登録番号:1303820

綴葉装。箱入。〔江戸前期〕写。伝荒木素白筆。紺色地九曜立涌布表紙。縦8.8cm×横12.4cm。外題、なし。内題、「女房三十六人歌仙」(本文同筆)。料紙、色変わりの唐紙。見返し、金砂子散。遊紙、前後各1丁。毎半葉に和歌1首と作者名を散らし書



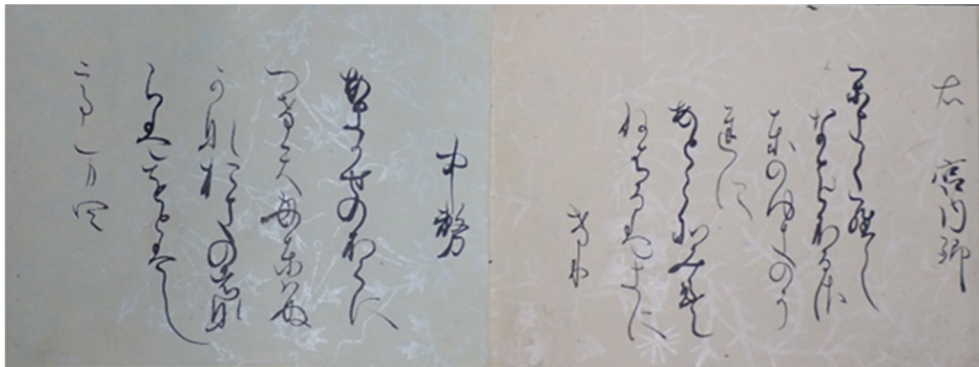
きする。字高、約 6.2cm。箱書、蓋の表面中央に「荒木素白筆／女房三十六人哥仙」と墨書。蔵書印、箱と蓋の内側下方に「端居藏」（陽・朱・方・単）、「北野克／監藏書／屋之印」（陽・青・方・単）。荒木素白は江戸前期の書家（1600～1685）。小野道風の書風を好んだ。

『女房三十六人歌仙』は女流歌人ばかりを集めた秀歌撰。鎌倉時代の成立で、撰者は未詳。掲出の中務なかつかきは 10 世紀に活躍した女流歌人。

中務

あきかぜのふくに／つけてもとはぬ／かなおぎのはな／らばをとほし／てまし

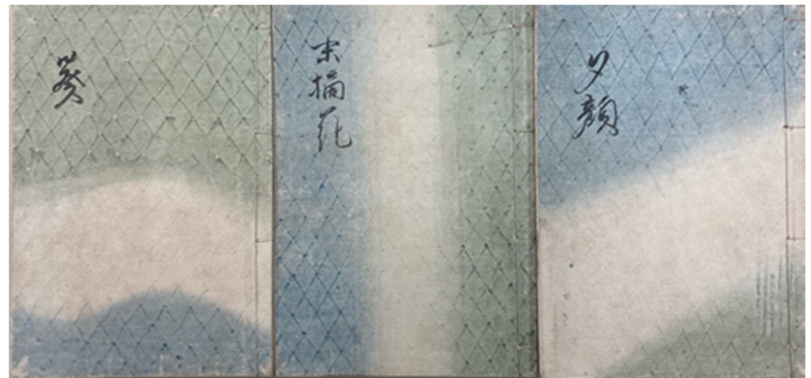
「秋」に「飽き」を掛け、「あの人は私に飽きたようで、風の便りも無くなった。私が荻の葉ならば風に音は立てたろうに（返事はしたろうに）」といった意。



### C、源氏物語 20 卷 20 冊 登録番号：1410608～1410627

袋綴。〔江戸中期〕

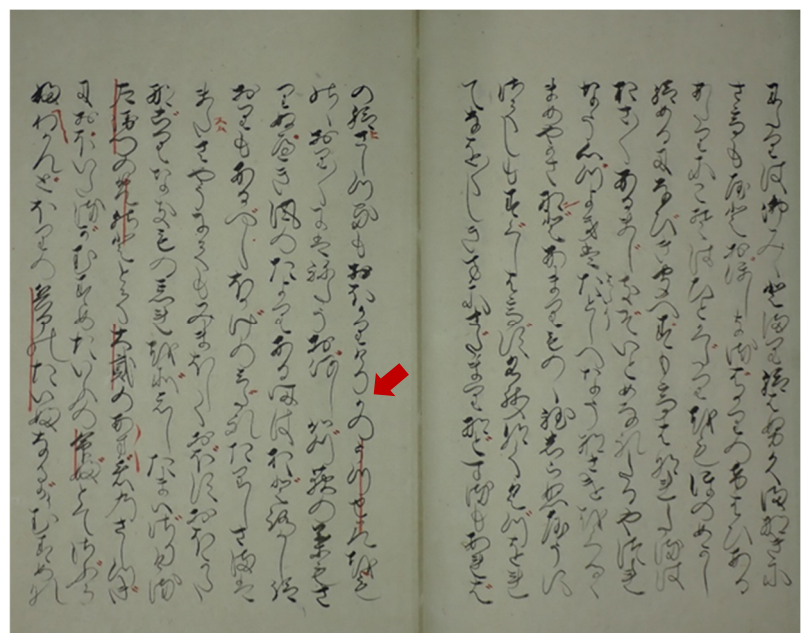
写。伝竹屋光忠筆。夕顔など 20 卷存。縹・萌黄色網目文様表紙。縦 19.8cm×横 13.7cm。外題、表紙左肩に本文同筆で打付書。内題なし。



本文料紙、楮紙。見返しも同じ。毎半葉 9 行。和歌は改行して 2 字下げで書きはじめ、末尾はそのまま地の文へ続ける。字高、約 15.8cm。遊紙、各冊とも前後 1 丁ずつ。蔵書印、各冊の見返し左上に「國太」（陽・朱・方・飾枠、縦 2.1cm×横 1.2cm）を捺した紙片（縦 3.6cm×横 1.6cm）を貼り付ける。各冊とも朱引きや朱点、主語や引歌に関する注記などがある。本学図書館には僚巻の宇治十帖（登録番号：1392046～1392055）も所蔵される。

【参考文献】海野亜理沙「光忠・隆典写『源氏物語』について」(国文鶴見 54、2020 年 3 月)

掲出したのは末摘花巻の冒頭（矢印）。





かのうつせみを、も / ののおりおりにはねたうおぼしいづ。荻の葉もさ / りぬべき風のたよりある時は、おどろかし給 / おりもあるべし。

源氏は自身の懸想を拒んだ空蟬を妬ましく思う一方、軒端萩にもしかるべき折には手紙を送っているらしい。軒端萩は空蟬の義理の娘で、源氏は空蟬と間違えて彼女と恋仲になった。

この部分、Bの中務歌と「荻の葉」・「風」の言葉が共通し、これを踏まえた可能性がある。中務歌の男は女へ手紙も送らなくなったが、源氏は人違いから始まった恋でも軒端萩との交流を絶やさない。物語では直接的には語られないが、引歌の内容と比較することで、源氏の恋愛観が窺えるのではないか。

#### D、〔三十六歌仙集〕1冊 登録番号：1401111 \*『〈光悦〉歌仙大和抄』から歌意図を除いたもの。

大本1冊。元禄7年[1694]、江戸・伊勢屋孫三郎刊。武陽桃子序。後補書題簽「三十六歌仙集」。三十六歌仙の和歌は本阿弥光悦筆、絵師は杉村治兵衛もしくは菱川師宣とされる。後人による手彩色あり。

他に、元禄9年須藤権兵衛（江戸）版がある。元禄7年版は、鶴見大学以外に、国文学研究資料館・都立中央図書館加賀文庫にも所蔵されるが、加賀文庫本は下巻のみであり、完本は珍しい。

また、鶴見大学本は国文学研究資料館本や加賀文庫本にはある注釈部分（歌仙の略伝、和歌の注釈、ならびに歌意絵）がなく、歌仙絵のみで仕立てられている。元禄9年版にも歌仙絵のみの1冊本が確認できることから、元禄7年版も注釈部分を入れたものと、除いたものとが売られていた可能性が考えられる。

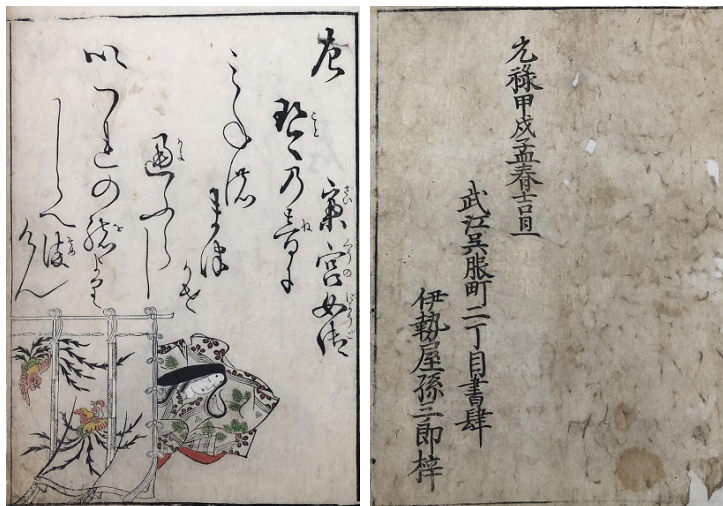
さて、掲出した徽子女王（929～985）は、伊勢斎宮を退下後に村上天皇の女御となったため、「斎宮女御」と称された。

左 斎宮女御

琴の音に／みねの／まつ／かぜ／通ふら／し／いづれの緒より／しらべ染／けん

琴の「緒」と山の「尾」を掛け、「響きあう琴の音と松風はどちらの「お」から奏ではじめたのか」という意。公任は『拾遺抄』（雑下・514）や『和漢朗詠集』（管弦・469）などにも採る。徽子女王は琴の名手でもあった。琴の音と松風を重ねる手法は以降の和歌の世界に定着する。

【参考文献】山口恭子『「歌仙大和抄」と本阿弥光悦流手本の刊行』（『法政大学文学部紀要』68、2014年3月）・鈴木淳『江戸の歌仙絵 絵本にみる王朝美の変容と創意』（国文学研究資料館、2010年）



#### E、源氏物語 54巻54冊 登録番号：1410821～1410874

袋綴。〔江戸初期〕写。縹色無地表紙。縦 25.9cm×横 20.2cm。外題、表紙中央の白題簽（縦 15.6cm×横 3.1cm）に巻名と巻数（「一」～「五十四終」）を书写。内題なし。本文料紙、楮紙。見返しも同じ。毎半葉 10 行。和歌は改行して 2 字下げで書きはじめ、末尾はそのまま地の文へ続ける。字高、約 22.0cm。遊紙、各冊とも前 1 丁、後なし。蔵書印、各冊とも前遊紙オ右下に「愴虚齋／圖書記」（陽・朱・方・単、縦 4.2cm×横 2.0cm）。2～3 人による寄合書か。



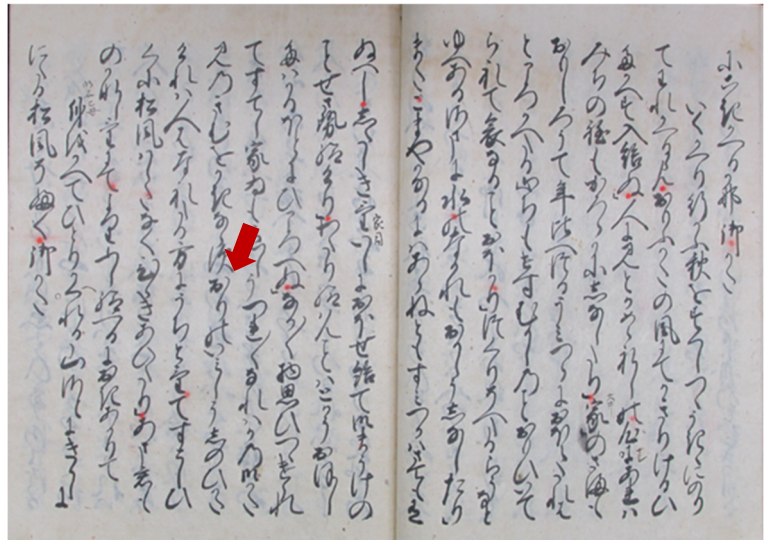
本文は青表紙本系統で、特に肖柏本に近い。全体にわたって句読点や引歌を示す合点が朱で付される。また、異本注記や主語の補足、あるいは簡単な文意などが墨で書き入れられ、特にはじめの方の巻々はその分量も多い。さらに、前遊紙には各巻における光源氏の年齢や巻の概略などが記される。

明石君は源氏の強い勧めで上京したが、源氏はすぐに訪ねもしない。紫上などに憚ったためで、自身の「身の程」を思い知らされた明石君は源氏形見の琴を弾く（矢印）。

おりのいみじうしのびがた／ければ、人はなれたる方にうちとけて、すこしひ／くに松風はしたなくひびきあひたり。

源氏へのひそかな慕情を悟られぬよう、明石君は人けのない所で琴を弾いた。しかし、松風が決まり悪くも響きあってしまうという意。巻名の由来にもなった印象的な場面。

これはDの斎宮女御歌などが詠む「松風は琴（特に夜の琴）の音に似ている」という通念を踏まえたもの。



#### F、〔三十六歌仙〕 36枚 登録番号：0303821

色紙。〔江戸末期〕写。伝土佐光孚筆。縦 30.2cm×横 23.3cm。「光孚」（墨・陰・楕円・縦 2.1cm×横 1.5cm）の落款印あり。

土佐光孚は江戸後期の絵師（1780～1852）。父光貞の後を継いで画所預となり、寛政2年（1790）の内裏造営の際には障壁画を描いた。『扶桑画人伝』には「光貞ヨリハ画オアリテ時ニ賞誉セラル」と記されるが、当該資料は他の光孚の絵と比較しても画風がやや異なっており、俗画に近いものか。

掲出した藤原興風は10世紀初頭に活躍した歌人。

藤原興風

たれをかも／しる人にせん／高砂の／松もむかしの／ともならなくに

「誰を知己としたらよいのか、高砂の松でさえ昔なじみの友というわけではない」といった意。『古今集』（雑上・909）や『百人一首』（34）などに採られた著名歌。公任は『和漢朗詠集』（交友・740）にも撰ぶ。



#### G、〔源氏物語〕(伝嵯峨本) 17巻 17冊 登録番号：1047073

大本。〔慶長中頃[1600頃]〕刊。近世初期に京都嵯峨で出版された、主に木活字を用いて刷られた版本を嵯峨本と呼ぶが、本書を嵯峨本とする立場もあるが、一般的には「伝嵯峨本」と称される。

Eの場面の後、源氏が明石君と久々の対面を果たす。お供として同行した靱負尉（空蟬の弟）も、明石君付きの女房へ懸想じみた言葉をかける。すると、女房は

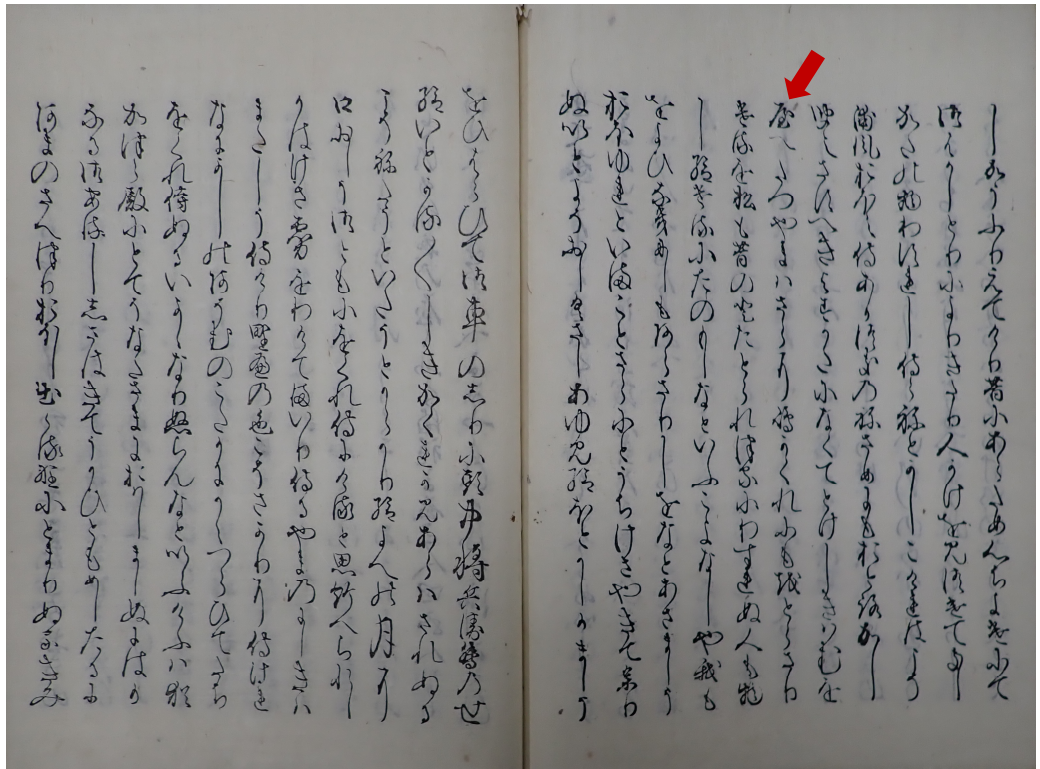
やへたつやまはさらに嶋がくれにもをとらざり／けるを、「松も昔の」とたどられつるに、わすれぬ人も物／し給けるにたのもし。

と返答したため、靱負尉は「あさましう」思つて退散する。というのも、あまりに引歌づくめであったため。



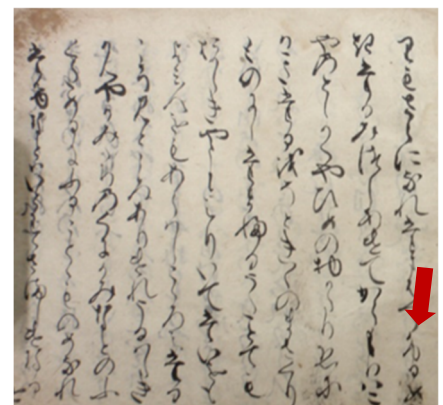
まず、「八重たつ山」は『源氏物語』の古注釈書『源氏釈』によると、「白雲の八重たつ山の峰にだに住めば住まるる世にこそありけれ」を踏まえ、雲が七重八重に立ち上るような深山であっても、住めば住まれる世の中だといった意。次に、「島がくれ」はAの人麿歌、「松も昔の」はFの興風歌を引いたもの。

つまり、この女房は「八重たつ山（=明石君の大堰の屋敷）は、まったく島隠れ（=明石）にも劣らないけれど、松も昔の（=友が一人もいない）と茫然としてしまうときに、（私を）忘れていない人もいらっしやっただの頼もしい」と言ったわけ。鞍負尉を拒絶するような内容ではないが、引歌が多すぎて気障な印象を与える。



H、『源氏物語』3巻3帖（蓬生・胡蝶・総角、存） 登録番号：1392808～1392810

綴葉装。〔室町後期〕写。二重箱（ただし外箱は転用されたもの）。蓬生巻の書誌を記す。表紙は龍頭鷓首の浮かぶ水辺に鳥居と松を描き、縦10.3cm×横11.7cm。外題なし。内題なし。遊紙なし。本文料紙、斐楮交漉。見返し、金泥霞引き金銀箔野毛散らし。每半葉11行、和歌は改行して2字下げで書きはじめ、末はそのまま地の文に繋げる。字高、約9.1cm。墨付31丁。奥書なし。蔵書印なし。



末摘花は源氏が須磨へ退去すると困窮し、女房なども離散する始末。その慰めの1つが「かぐや姫の物語」を「絵に描きたる」ものであった。

ふるめ／きたるみづしあけて『からもり』・『はこ／やのとじ』・『かぐやひめの物がたり』 ゑに／かきたるをぞ、ときどきのまさぐり／ものにしたまふる

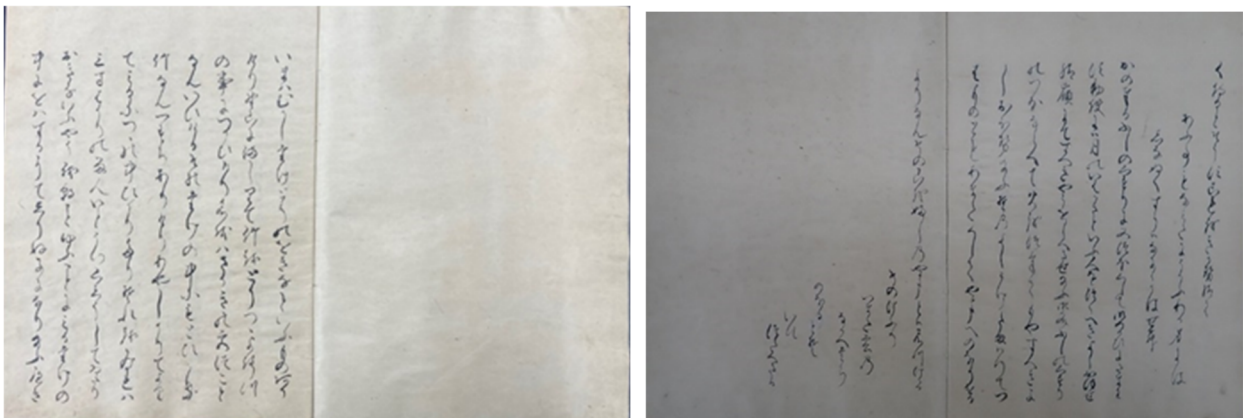
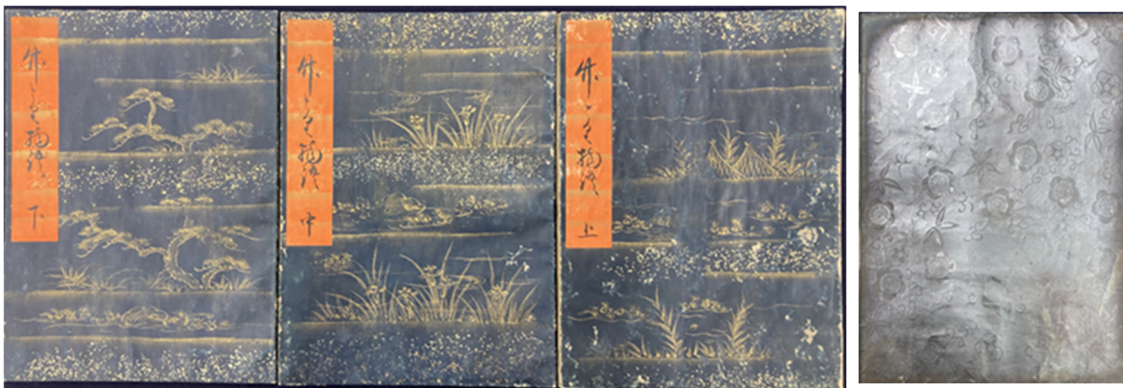
「かぐや姫の物語」は作品名であって、引歌ではないが、末摘花の特徴を読者に印象づけるのに一役買っている（〔参考2〕参照）。

〔参考2〕『竹取物語』1巻3帖 登録番号：1413225～1413227

綴葉装。〔江戸中期〕写。紺地金泥下絵表紙。縦 24.7cm×横 18.1cm。外題、表紙左肩の金泥霞引下絵朱色題簽（縦 15.0cm×横 3.0cm）に「竹とり物語 上（～下）」と墨書（本文と同筆か）。内題なし。見返し、梅花と草花の文様を艶出しした銀紙。本文料紙、斐紙。毎半葉9行。和歌は改行して2字下げで書きはじめ、上句末で改行し、下句は3字下げで書きはじめて歌末で改行。各帖末尾では十数文字を散らし書きにする。字高、約 20.0cm。遊紙、上は前後各1丁、中・下は前1丁、後なし。奥書・識語なし。蔵書印なし。

掲出したのは上巻の冒頭（竹取の翁がかぐや姫を見付ける場面）と下巻の末尾（かぐや姫が帝に贈った不死の葉が富士山の山頂で焼かれる場面）。

『竹取物語』は『源氏物語』絵合巻で「物語の出で来はじめのおや」と称されるが、同時に「なよ竹の代々に古りにけること、をかしきふしもなけれど」とも評され、当時、すでに古めかしい物語と認識されていたらしい。Hでは末摘花が「古めきたる御厨子」から『竹取物語』の絵を取り出しており、やはり彼女の趣味や性格を象徴している。



### Ⅲ さまざまな歌仙

歌仙の和歌は文学の世界だけでなく、書や絵画といった美術の世界にも影響を与えた。これまでに見た「B、女房三十六人歌仙」は書、「F、〔三十六歌仙〕」は絵画、「D、三十六歌仙集」は両者を組み合わせたとような性格をもつ。最後に、そうした多様な歌仙の世界を確認する。

#### I、〔歌仙〕5巻5帖 登録番号：1272896～1272900

綴葉装。〔江戸前期〕写。三十六人歌仙・武門歌仙・中古歌仙・新歌仙・女歌仙の5種。漆箱入。蓋の中央に金蒔絵で「歌仙」と記す。縹色地に藤花などの草花文様をあしらった布表紙。縦 9.1cm

